SF的読み解き
子どもという風景

第四回　アリストテレスとおばあちゃんたち

堀内　守

深く惟れば

一見あまり関係なさそうな物事をあえて結びつけてみることにしよう。そうすると、その隙間から私たちの想像力をふくらませる面白い風景が見えてきて、私たちの身や心を揺り動かしはじめる。

たとえば、こんなのはどうだろうか。

アリストテレスといえば、古代ギリシアの哲学者の名前である。アリスとテレスといえば、デュエットでうたう歌手たちの名前に変わる。少々いたずらをして、「アリ、スト、テレズ」（蟻スト、照れず）などという遊びも可能である。新聞の見出しのように。

アリストテレスは、師のプラトンと違って、自然や人間の生活について丹念に材料を集め、きちょうめんにメモをとり、コツコツと分類をしている。そしてそれをやや大仰な表現で記述した。重々しいが、内容はいささか

単調である。分類をきちんとやり過ぎると、物語性が乏しくなるものらしい。そんなことを思いながらアリストテレスの作品を読み進めていくと、その文章の裏側にわれわれが幼い頃つき合った「おばあちゃん」たちが浮かびあがってきた。

二千数百年も前のギリシアの哲学者の記していることと、二十世紀のある時期までの「おばあちゃん」たちの語っていたことが実によく似ているからである。特に「世間」に関する知恵がよく似ている。「世間」「世の中」「広い世間」「渡る世間」等、さまざまな文脈が絡み合っていた。利害がからめば「世間」のイメージは凄まじき相貌をとってあらわれる。「生き馬の目を抜く」とか「火事と喧嘩は江戸の花」とか、「憎まれ児世にはばかる」とか、格言、諺、箴言が続々と紡ぎ出される。

反対に、利害が抜き去られたとき、「世間」はまことに大らかな、まるで夢の世界のようにふくらみはじめ、ふんわかした気分にさせてくれる。「渡る世間に鬼はなし」、「可愛い子には旅をさせろ」「旅は道連れ、世は情」というようなぐあいに。

われらが「おばあちゃん」たちが元気だった頃、井戸端や川端や、たまさかの茶呑み話の場で語っていたトピックスは、どこまでがホントで、どこまでが神話で、どこまでが創作で、どこまでが噂で、どこまでが伝聞だったのだろうか。まるで、次々とことばが交わされ、笑いが生まれ、ざわめきが生まれ、そうかと思うと、急に声をひそめ、あたりを見まわし、ひそひそ話をする。かと思うと、乱暴なことばで子どもたちを叱り、次の瞬間にはほめている。ことばという異様な怪物が彼女たちをつき動かし、彼女たちをして語らしめていたのだろうか。

形而上学（メタフィシカ）

アリストテレスの著書の一つに『形而上学』と題する作品がある。〝形而上学〟とは遠い世界のことばのように思えもしよう。だいいち、音がいかめしい。「ケイジョオガク」というのだから。イミの方をこれだけでさぐるのはむずかしい。国語辞典を引いても、その説明は

まことにわかりにくい。哲学辞典では、もっとわかりにくくなる。お試しあれ。

でも、もともとはそんなにいかめしいイミはもっていなかった。いろいろな本にそのいわれが記されているから、以下の説明は余分なのだが、そのことを承知の上であえておつき合いをいただくと、ちょっと微笑をさそうようなエピソードがそこに浮びあがってくるのである。

アリストテレスは、自然について『自然学（フィシカ）』と題する本を書いた。いろいろな本を並べ、一つの大きなテーマが浮かびあがるようにしようと思ったものらしい。『メタフィシカ』は、『自然学』のあとで書かれ、あとに置かれた。「メタ」とは「あと」の意である。平たくいえば、こんなことになろうか。まず『自然学』を書いた。人間をとりまく世界、人間が飲んだり、食べたりすることもそこに含めた。しかし、人間は単に飲んだり、食べたりするだけでは満足しない動物である。それを超えた世界をつくり出している。

アリストテレスは、それを「超えた」ところを一巻にまとめた。何という題をつけようか迷った。結局、うまいアイディアに恵まれず、「あーとーで」の歌よろしく、先に延ばした。「あーとーで」決めようと思ったのである。

われらが「おばあちゃん」たち

「そりゃ、そうだろうよ。名前をつけるのはなかなかむずかしいものだ。急いでつけたら、のちのち（メタ・メタ）困る。〝急いては事を仕損ずる〟というからな。〝下手な考え、休むに似たり〟さ。いい考えの出てこないときは、思い切って休み、先へ延ばしておくのがいいのさ。世の中って、そういうものだよ。」

「くわしいことは知らないが、まあ、こんなこともいえるな。〝善は急げ〟とも、〝今日できることを明日に延ばすな〟ともいうからね。いろいろな名前を舌先でころがして、どっちにしようか、こっちにしようか、ほおずきをころがすように、舌先三寸で転がしているうちに、ことばはしだいに角がとれて、丸い、ころころしたもの

に変わっていくものだ。

「あとか。〃うしろ〃〃背〃、時の〃後〃、いろいろふくらんでいくなあ。事の後先を考えるのは大事なことだよ。順序をまちがえたら押しても引いてもどうにもならないことが出てくる。因果はつねにめぐりくるものよ。原因はいつも結果より先にある。結果はいつも原因よりもあと（メタ）にある。前世の因果がこの世において姿をあらわす。因果はみーんなお天道さまとホトケさまの手のうちにある。」

名前の記号学

「おばあちゃん」たちの言い分はアリストテレスが重々しく記していることに接近する。

彼女らの名前。それにも一定の徴（しるし）があり、あるグループにまとめあげることもできそうである。アリストテレスならば、喜び勇んでメモをとることだろう。

ある年代の「おばあちゃん」たちは、ほとんどがひらがなの名前である。呼ぶときにはかならずその名の上に「お」がついた。曰く、おりん、おこと、おしま、おりく、おむら、おきく、おこん、おいと、おすて、おいち、おもと、おみず、おたつ、おとら、おくま、おたき……。まるで、子丑寅卯……の十干十二支のまんだらのようでもあり、花園の花のオンパレードのようでもあり、音の組み合わせを競うコンクールのようでもある。

ある年代から、そのまんだら模様が変わり出す。「枝」「江」「代」などがあとにくっつく。「メタ名」？「きく枝」「きく江」「きく代」。「菊枝」「菊江」「菊代」。こんなぐあいに華やいでくる。知覚も拡がり、「薫」とか「香」なども動員されてくる。「紫」「みどり」「美登理」「ミドリ」。萬葉仮名が再発見されて、「奈津江」「香保留」なども登場。これと並行して、「貞」「福」「幸」「和」「洋」「敬」「美」「久」という「メタ・メタ名」がファッションの世界を切り拓く。そして、ついに「……子」が許される。どっと花開く「子」の世界。それは「メタ・メタ・メタ名」とでもいうべきだろう。

アリストテレスなら、こういうオンパレード、こうい

うファッションに驚嘆し、十干十二支、陰陽五行の与える深みを大いなる宇宙誌（コスモロジー）としてまとめあげたに違いない。そして、もし彼が今日の日本にやってきたなら——

大河ドラマや連続テレビ小説の主人公たちの名がそのまま番組の名になっていて、「おはなはん」だの、「おしん」だのが人気を得ていることに感嘆し、歌の世界にも「お富さん」だの、「与作」だの、「山口さんちのツトム君」だの、「およげ、たいやきくん」などが一世を風靡したのを知って、思わずひざを打ったことであろう。

美しい記号の意味作用を味わおう。

「さくら」「佐久良」「桜」。「ウメ」「うめ」「梅」。「ゆり」「百谷」「由理」。

「春」「夏」「秋」「冬」。

光の系列——ひかり、光枝、光江、光代、光子。輝代、輝子、照江、照子、月子、明子、晴子、晴代。つまり、「光」「輝」「照」「明」等はある地上から浮上する。しかし、「闇」「暗」「滅」「暗」などは遠く押しやられる。

数の系列。百、千、萬。「百枝」「千代」「千代子」等。「一枝」「三子」「十三子」。

徳の系列。貞、淑、良、徳、道。「貞子」「淑子」「良子」「徳子」「道子」など。

あとは、今様アリストテレスにまかせることにしよう。われらがおばあちゃんたちの中には、これらの本名のほかに、驚くべき多彩な名をもっている人もいた。江戸時代までの名残りである。「通称」があった。「幼名」があった。「実名」を用いずに「忌み名」を用いている人もいた。「奉公名」をもつ人もおり、「出世名」をもつ人もいた。

ある見方によれば、これらは大変煩瑣（はんさ）な慣習のように見えよう。しかし、自分が数個の名前を名乗り、他の人びともそれをちゃんと器用に使い分けていた時代がつい先頃まで続いていたことを見落してはならないだろう。

命名の秘儀

落語の「寿限無」は、おめでたい名前を全部つけてしまい、その長たらしいのに迷惑するおかしさをテーマとしている。実際にはそんなことはないが、その〝愚か〟さを笑いとばせないのは、私たちが一人一名という原則を当然と見なしているからである。一人の人間の名前が一つであるべきだ、という原則は近代的な行政の整備とともにはじまった。改名は禁止された。だから「寿限無」を聴いているうちに、主人公の心根があるペーソスをもって迫ってくるのである。

よい名を自分の子どもにつけてやりたい。そういう気持はだれにもある。だが、いったい「よい名前」とはどんな名前なのだろうか。

それにも歴史はあるのだ。そしてもっと面白いのが姓。アリストテレスが日本人の姓を分類したとしたら、どんな仕方を試みたことだろうか。占いによると、字画が物をいうらしい。もともと農耕社会を母胎としているような姓が多いのが日本の特徴のようである。イメージのあふれる姓もある。地形、地勢と関係のありそうな姓

もある。植物の名をそのまま取って姓にしたようなものもある。しかし、これらの多くは、漢字の組み合わせによってどんどん広がっていただろう。

さまざまな期待やねがいをこめてつけた名前が、たくさん並ぶと、秘儀の要素は薄くなり、ついには漢字の順列と組み合わせという数字の手法に近づいたり、漢語の組み合わせの妙なる遊びに近づいていく。

秘儀がなぜ遊びに近づくのか、こんどは目を空に向けてみる必要がある。夏の空を例にとってみよう。

星座の名前

夏の空の星。一つ一つを眺めるよりも、乳を流したような天の川（英語では「ミルキイ・ウエイ（乳の道）」ともいう）、ひしゃくが折れ曲ったような北斗七星、そのちょうど反対側に見えるカシオペア座などを見てみることにしよう。昔の人びとは、空の星を眺め、そこに何らかのカタチを見出した。星の群は何か別のもののように見えた。

星座の名はギリシア人の（というよりも、ギリシア神話の、というべきだろうが）独演場のように思える。アンドロメダ、オリオン、アンタレス……。ヘビ座、琴座、冠座……。

今日の私たちは、北の空に輝く七つの星を見て、「ひしゃく」の形を思い出す。北斗七星は「ひしゃく」であるかのように見えるのである。しかし、古代のギリシア人たちは、そこに「大熊」を見出した。オリオン座と命名されている星座を見て、そこにオリオンという人物の動きを見出すには私たちはかなり無理をして、いろいろ補ってみなければならない。しかし、古代の人びとは、オリオン座にオリオンという主人公の上演を見たのである。

あるものを見る。それをそれそのものと見ずに、別の何かであるかのように思う。別の何かのように見なす。この力こそ秘儀と遊びの誕生する場であった。神話と芸術の誕生する場であった。

空の雲、それはいろいろな形に変わる。「入道雲」「い

わし雲」のほか、子どもたちは一つの形からさまざまなものを連想する。そして、それを口に出して言いたくなる。綿のよう、アイスクリームのよう、スーパーマンのよう、プロレスラーのよう。それも命名の秘儀なのである。同時に遊びでもある。物語の発端でもあり、詩の発端でもある。

アリストテレスの語らなかったこと

百科全書よろしく、多方面に目配りをしたアリストテレスも、わが「おばあちゃん」たちのしたたかな生き方については言及していない。時代が違うから、といったのでは答えにはならないのである。

わが「おばあちゃん」たちは、気の合った仲間と遠慮なく語る時にはまことに明けっ広げて語ったものだ。そこに子どもがいようが、おかまいなしである。浜辺で、街角で、洗濯場で、井戸端で——要するに、あらゆる場で語ったものらしい。

「この草は胃の薬になる。あの草は赤い実をつけるが、あれは毒である。」

「あの家の娘ももう年頃だ。どこかのお嫁に世話をしなけりゃ。」

こんな会話もあった。しかし、時のたつのを忘れ、時には道端に腰をおろして延々とおしゃべりに及ぶこともあったようである。他人の空然の不幸に同情し、涙を流す。次の瞬間にはどこかの家で子どもが生まれた話に移り、呵々大笑する。

「あたしだって、まだ生めるぞ」などと言って気張ってみたり。

道徳律

「おばあちゃん」たちの道徳律は、文字に表現するのがむずかしかった。筋が一貫しているようでもあり、例外がたくさんあったりすることもあり、場当りのようにも見え、また場面ごとにそれは適った行動を器用に使い分けているようにも見えた。気前のいいときもあり、ケチであることもあった。

とりなし、仲裁、悪口、駆け引き、根まわし。横柄さと謙虚さが共存し、強欲なところと気前のいいところが共存し、おそるべき能弁さと口下手とが共存していた。

「人間は本質的に政治的動物（ゾーン・ポリティコン）である」とは、アリストテレスの有名なことばである。この場合の「政治的」にはいろいろな脈絡が重なっている。身内のなかでも、親子・夫婦・血族・イエ・親戚等のしがらみが重なっている。向う三軒両隣りとのつき合いのルールもある。町内・業界・取引先ともなれば、人間交際の基準はだんだんと義理に近くなり、固苦しく、水くさくなるだろう。これらの向うには赤の他人という厖大な数の人びとがいる。甘えは許されず、おつき合いするには気疲れがする。「気が許せぬ」のである。

「おばあちゃん」たちは、孫の養育には直接責任をもってはいない。したがって、どちらかといえば、幼い孫たちとのあいだでくつろぎを感じ、安らぎを感じる。自分が当事者となって何人もの子どもを夢中になって育ててきた時は遠く去ったように思え、目の前の孫を見ても、自分がどうやって子どもたちを育てたか、まるで夢のようにしかおぼえていない。

「おばあちゃん」たちは、初めて幼児と接するようなつもりで孫と対面する。そして、ゆっくりゆっくりと、自分の子を育てた時の経験を想起する。単に想起するだけではない。それらが鮮明に湧きあがるにつれて、彼女らはそれを口にしたくてたまらなくなる。それは、事実のレポートというよりも、語ることであの経験が形をだんだん鮮明にしはじめるのを楽しんでいるのに近いのである。

「昔々、あるところにあったそうな……」「あれはおばあちゃんがお嫁に来た年のことだった。三国一のお嫁さん、とほめられたものだった……」

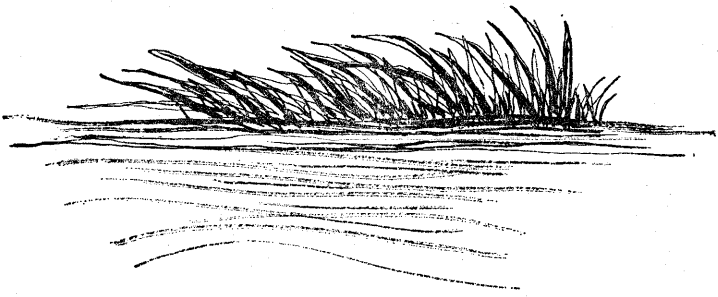
「おばあちゃん」は目をつむる。過去のことを語りながら、あきらかにそのイメージが現在にあることに自分で没入しているのである。

「あれからもう二昔も、三昔もたってしまった。いろいろなことがあったけど、みんな達者で生きて来れたから

よかったと思っているよ」（十分な間）

そこからアリストテレスばりの話がはじまるのである。アリストテレスが人間を「政治的動物」と定義したのは有名だが、それと並び、彼はまた別の定義もしている。「ロゴスをもった動物」というのがそれである。

ところが面倒なのはこの場合の「ロゴス」である。それはふつう「理性」などと訳されるが、その周縁にはさまざまなイミが絡みついている。「論理」「ことば」というようなのがその一例である。

ロゴスというのはどうもそもそものところから過剰を含みもっているらしい。つまり、単なる生存（食べ、寝るというような）を超えるエネルギーである。よくもまああんなに書きまくったものだ――アリストテレスの作品を見てそう思う。わが「おばあちゃん」たちを思い出すたびに、よくもまああんなにおしゃべりしたものだ、と思わせられる。条件さえ整えば、わが「おばあちゃん」たちも、アリストテレス全集に匹敵する著作集を書けたかもしれない。でも、やっぱり書かなかったろうなあ。「めっそうもない」とか「こわい、こわい」と断わるだろうか。

（名古屋大学）